原著論文

コロナ禍の成人看護学実習（急性期）における学生の経験からの学び

～看護リフレクションシートの分析～

LEARNING OF STUDENTS FROM THEIR EXPERIENCES IN ADULT NURSING PRACTICUM （ACUTE CARE）UNDER COVID-19 PANDEMIC

～ AN ANALYSIS OF REFLECTION SHEET FOR NURSING ～

阿　部　春　美　・　泉　田　さとみ　・　岡　崎　優　子
ABE Harumi,　IZUMIDA Satomi,　OKAZAKI Yuko,

伊　藤　茉莉子　・　遠　藤　美穂子　・　小　倉　真　紀
ITO Mariko,　ENDO Mihoko,　OGURA Maki

キーワード：成人看護学実習、経験からの学び、リフレクション
Key words：adult nursing practicum, learning from experience, reflection

要　旨

本研究の目的は、コロナ禍の成人看護学実習（急性期）の看護リフレクションシートより、学生が経験を振り返り、「大切にしている看護」へと学びを深めていくプロセスと実習形態による学びの違いを明らかにし、看護学実習にリフレクションを活用する意義を検討することである。記述内容「忘れられない場面」、「こだわっていること、関心を持っていること」、「今、私が大切にしている看護」について、テキストマイニングで分析した。「私が大切にしている看護」は、実習形態にかかわらず【患者の苦痛や不安を理解し寄り添う看護】【安心・安全を守る看護】であった。臨地群は、【思いが表出できる関わり】【五感を使ったコミュニケーション】【入院前の生活を踏まえ退院を見据える】、学内群は、【チーム医療】【質の高い知識・技術の提供】と学びの違いがみられた。学生は実習形態にかかわらず、成人看護学実習（急性期）の経験から「大切にしている看護」へと学びを深めており、看護学実習にリフレクションを活用する意義が示唆された。

Abstract

The objective of this study was to explore the significance of adopting reflection practice in nursing practicum. The study was conducted, based on reflection sheet for adult nursing practicum（acute care）under COVID-19 pandemic, by clarifying the process where students deepen learnings toward "nursing care which they value" looking back on their experiences and, also differences in learning that would arise from formats of practicum. Text mining was used to analyze responses to reflective questions such as "What scenes you cannot forget", "What are you particular about and interested in", and "What nursing care do you value at present". The result showed that, regardless of practicum formats, students gave such responses to the reflective question "What nursing care do you value" as "Nursing care where I understand patients' suffering and anxiety to stay present with" and "Nursing care where patients' reassurance and safety are secured". Differences were observed in learning between two practicum formats; clinical placement group responded that "Interactions where I can express my feelings and thoughts", "Communications using five senses", and "Looking ahead to hospital discharge considering patients' lives before hospitalization", and on-campus group responded that "Healthcare in team" and "Offering quality knowledge and techniques". Regardless of the formats of practicum, students have deepened learnings toward "nursing care which they value" through their experiences from adult nursing practicum（acute care), suggestive of the significance of adopting reflection practice in nursing care practicum.

Ⅰ．はじめに

近年、実習の現場となる病院では患者の在院日数の短期化、患者の安全確保、患者の権利の尊重など社会状勢の変化から、実習の範囲や機会が限定され、実習が十分に展開されにくい状況［1］が指摘されている。特に急性期実習では、生命の危機的状況や健康状態が急速に変化しやすい患者、入院期間が短い周術期の患者を受け持つことが多く、患者を受け持つ期間が短縮化している現状である。2020年新型コロナウイルス感染症の拡大（以下コロナ禍とする）により、看護学教育の臨地実習は実施が困難となり、開講時期や実習方法の変更を余儀なくされた。各養成機関では、臨地実習のための実習施設との調整、感染対策の実施、様々な代替方法を駆使して教育の質の維持が試みられた［2］。このような背景の中で、A短期大学の成人看護学実習（急性期）においても、臨地実習の時間短縮、代替実習として学内実習に置き換え実習を実施した。今後、「新しい生活様式」が求められるウィズコロナの中で、臨地実習の意義を再考しながら、看護実践能力の育成が課題となる。

臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である［3］。看護基礎教育において、実習の場でしか経験できない具体的、個別的な経験を学内で学んだ知識、技術、態度と結びつけ、看護活動が展開できるようにすることが求められる［4］。しかし、臨地実習で経験を積み重ねていけば、これらが身につくわけではない。実習環境の中で学習を効果的にするためには、自らの経験を振り返り言語化し、経験から学ぶ過程を意図的に作りだす必要がある。

日本の看護基礎教育では、リフレクションの考え方を学習の道具として取り入れている報告があり、臨地実習の中で行うことにより、学生の実践の道具として効果が表れる、「リフレクションは

思考のスキルである」[5] と、述べられている。臨地実習を取り巻く社会状勢やコロナ禍のもとで行われる臨地実習において、経験したことを振り返り学ぶ機会を確保することは重要であり、「経験からの学び」のプロセスを振り返る枠組みとして、陣田泰子の概念化シート [6] を一部修正した看護リフレクションシート（図１）を用いて考察することにより、看護学実習にリフレクションを活用する意義について示唆を得ることができると考える。

コロナ禍における看護学実習に関する先行研究では、コロナ禍で看護学実習に臨む学生の思い、代替実習の方法や教育評価と課題が多く報告されている。しかし、コロナ禍の代替実習でリフレクションをキーワードとした研究は、中村ら [7] の母性看護学の学内シミュレーション実習後のリフレクション・デブリーフィングの効果、嶋津ら [8] の成人看護学の学内・オンライン実習にリフレクションを活用した効果についての報告と少ない。コロナ禍における成人看護学実習にリフレクションを適応し、実習形態の違いによる学びの比較を行った研究報告は現時点では見当たらない。

そこで本研究は、コロナ禍の成人看護学実習（急性期）において、看護リフレクションシートを用いて、学生が経験を振り返り、「大切にしている看護」へと学びを深めていくプロセスと実習形態による学びの違いを明らかにし、看護学実習にリフレクションを活用する意義を検討することを目的とする。

Ⅱ．本研究における用語の定義

経験からの学び：経験を振り返ることにより、気づきや学びを得ること。

リフレクション：起こった事象や自分の行為を内省すること [9]。

看護リフレクションシート（図１）：リフレクションの枠組みとして、陣田泰子の概念化シート [6] を一部修正し作成したワークシート。

Ⅲ．成人看護学実習（急性期）の概要

１．成人看護学実習（急性期）の位置づけとねらい

成人看護学実習（急性期）は、1年次の基礎看護学実習、2年次前期の成人看護学実習（慢性期）に続く実習で、急性期の成人患者を受け持ち患者や家族との人間関係に基づき、看護問題を明らかにし看護過程を展開する実習である。また、医療チームの一員としての役割を理解し、看護学生としての倫理観と責任を認識した行動ができることを目標にしている。実習は3年次で、実習期間は3週間（3単位）である。

２．代替実習における実習内容

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感

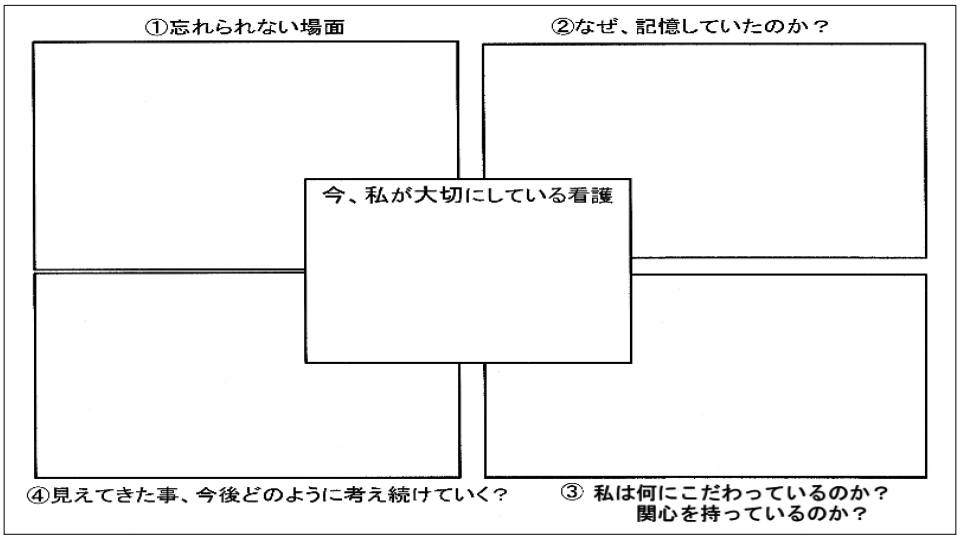

図１　看護リフレクションシート

染状況により、臨地実習の時間短縮、代替実習への変更を行った。実習形態にかかわらず、学習準備・まとめの期間として、実習1～4日目、14～15日目の6日間学内実習とした。実習5日目より臨地実習を行った学生は61名、そのうち1日臨地実習は35名、半日臨地実習が26名。代替実習として学内実習を行った学生は25名であった。代替実習事例は、実習目標に合わせ阿部［10］のシナリオ集を参考に2事例を設定した。

1）事例と設定理由

〈事例A〉2週目の5日間で受け持ち実習を実施した。事例は、50歳代男性、胆石症で入院2日目に腹腔鏡下胆のう摘出術が予定され、麻酔や手術による合併症予防と回復を促進するための看護を実施した。急性期にある対象は、生命の危機的状況や健康状態が急速に変化しやすいため、周術期の患者を設定した。

〈事例B〉3週目の3日間で機能別実習を実施した。事例は、50歳代女性、不整脈精査のため入院した患者で、基礎情報から起こりうる問題を予測し、患者の状態変化時のアセスメントと「一次救命処置（BLS）のスキル」を活用して初期対応を実施した。救急看護、循環状態が変化しやすい患者の状態観察、アセスメントができるよう設定した。〈事例A〉〈事例B〉ともに、高機能シミュレータ、看護実習モデル人形、教員による模擬患者を用いた。

Ⅳ．研究方法

1．研究デザイン

記述的な研究デザイン

2．データ収集期間

2021年5月～2021年11月

3．研究対象

2021年度にA短期大学看護学科に在籍し成人看護学実習（急性期）を履修した学生86名。臨地実習を経験した学生（以下臨地群）61名、代替実習として学内実習を経験した学生（以下学内群）25名を対象とする。

4．データ収集方法及び内容

1）データ収集方法

成人看護学実習（急性期）の臨地群・学内群共に実習14日目学内の最終カンファレンス「実習を通して看護を振り返り、自己の看護観を深める」において、陣田泰子の概念化シート［6］を一部修正した看護リフレクションシート（図1）を用いて、以下の順で実習の振り返りを行った。

陣田泰子の概念化シートは、『コルブの経験学習サイクル』や『庄司和晃の認識の3段階連関理論』をもとに、経験を概念化、言語化し、日常の看護実践を意味づけるための、文脈学習シートである［11］。陣田泰子の概念化シート［6］［11］の第3項目は、「私がこだわる看護の領域」であった。本研究では、学生が看護学領域や科目名と誤解することを避けるため、「私は何にこだわっているのか、関心を持っているのか」という表記に変更した。

(1) 第1段階（個人で記述）：陣田泰子の看護概念化スキルの研修を修了した教員がファシリテーターを担当し、学生個人で看護リフレクションシートの記述を行った。まず、忘れられない患者との関わりから想起し①忘れられない場面（現象の記述）、②なぜ、記憶していたのか（内省）、③私は何にこだわっているのか、関心を持っているのか（構造）、④見えてきた事、今後どのように考えつづける（未来・将来に向けて）、⑤今、私が大切にしている看護（本質）を看護リフレクションシートに順に記述する。無理に書こうとせず、メモでも箇条書きでもよい、浮かんだことを看護リフレクションシートに書ける範囲で記述する。

(2) 第2段階（仲間との語り合い）：実習グループの学生と担当教員、ファシリテーターの教員が参加して、仲間との語り合いを実施。学生は語ることで経験したことの意味を見出すとともに「大切にしている看護（本質）」を言語化する。

５．分析方法

収集したデータは、テキストマニングのソフトウエアKH Coder-3を使用し分析を行った。この分析はテキストデータを全体やクラスターごとにまとめ、短い言葉でその傾向や特徴を重要語、キーワードを抽出し、その出現頻度や同時出現関係等を分析できる研究手法である。質的データを数値化し単語の出現頻度や語と語の結びつきを統計的に分析できる［12］。手順としては、看護リフレクションシートの個人が特定される情報を削除しデータの匿名化を図り、テキストデータ化した。臨地実習を経験した「臨地群」、代替実習で学内実習を経験した「学内群」の２群に分類し分析した。

1）出現回数の上位150位までの用語の中で、同じ用語が異なる２語として抽出されたものは強制抽出して元データの前処理を行った。
2）今回は、看護観の概念化形成における振り返り記述の上で特に重要と考えられる看護の現象と構造、本質に着目し「忘れられない場面」、「こだわっていること、関心を持っていること」、「今、私が大切にしている看護」の３項目に着目し分析した。臨地群、学内群それぞれの「忘れられない場面」「こだわっていること、関心を持っていること」「今、私が大切にしている看護」の３項目について頻出頻度の高い上位150語を抽出した。
3）用語の関連をみるため、共起ネットワークを作成した。共起ネットワークとは、文章内での関連が深い用語を結び可視化できるように表現したものである。今回は主要な用語間の関連をみるため、用語の最小出現数を３に設定し、共起関係の強弱をみるため、最小スパニング・ツリーで表記した。

共起ネットワークとは、抽出後またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図、すなわち共起関係を線で表したネットワーク図である。言葉で意味のある最小単位に分けて、品詞を判別する解析形態素解析を行い、単語の出現頻度や語と語の結びつきを統計的に分析した。その後、素データの特徴や語と語の結びつきを確認して、コーディングを行った。さらに、重要なキーワードでありながら、漏れているものはないか、原文に戻り確認を行いながら、頻出サブグラフに含まれる語の意味を第１研究者、第２研究者で繰り返し検討し、研究者６名全員で確認した。研究者のうち４名はKH Coderの研修を受講後、分析の経験がある。

６．倫理的配慮

該当実習に係る成績評価終了後、看護リフレクションシートを使用するにあたり、対象者に研究の目的、匿名性の保持、研究参加の任意性と撤回の自由、研究参加の有無が成績を含め、個人の利益、不利益に影響することがないことを文書および口頭で説明した。データは個人が識別できないようにテキストデータ化したうえで使用することを伝え、承諾を得た。本研究において開示すべき利益相反はない。

Ⅴ．結果

対象者86名のうち、看護リフレクションシートの提出があった85名（回収率98.9％）（臨地群60名、学内群25名）のシートを分析対象とした。サブグラフの要約を【　】、抽出語を〔　〕、原文を〈　〉で示した。

１．単語出現頻出の特徴

臨地群、学内群の頻出単語を抽出した。「忘れられない場面」の臨地群では、５語以上の頻出語を選択し、〔患者〕〔言う〕〔術後〕〔シャワー〕〔手術〕〔表情〕が上位に抽出された。学内群では４語以上の頻出語を選出し、〔患者〕〔対応〕〔退院〕〔指導〕〔術後〕〔場面〕が上位に抽出された（表１）。「こだわっていること、関心を持っていること」の臨地群では、５語以上の頻出語を選択し、〔患者〕〔看護〕〔思う〕〔考える〕〔自分〕が上位に抽出された。学内群では４語以上の頻出語を選出し、〔患者〕〔看護〕〔安心〕〔不安〕〔寄り添う〕が上位に抽出された（表２）。「今、私が大切にしている看護」の臨地群では、６語以上の頻出語を選択し、〔患者〕〔看護〕〔寄り添う〕〔考える〕〔生

表１．忘れられない場面の頻出語
（臨地群５語以上・学内群は４語以上）

臨地群		学内群	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	49	患者	13
言う	21	対応	13
術後	14	退院	10
シャワー	9	指導	9
手術	8	術後	8
表情	8	場面	8
ありがとう	7	急変	7
場面	7	救急	7
退院	7	声	6
歩行	7	観察	5
笑顔	6	バイタルサイン	4
頑張る	5	ベッド	4
姿	5	看護	4
思う	5	行う	4
聞く	5	測定	4
離床	5		

表２．こだわっていること関心をもっていることの頻出語
（臨地群は５語以上・学内群は４語以上）

臨地群		学内群	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	78	患者	33
看護	13	看護	22
思う	12	安心	9
考える	9	不安	7
自分	9	寄り添う	6
思い	8	思う	6
笑顔	8	対応	6
生活	8	理解	6
不安	8	持つ	5
気持ち	7	看護	4
相手	7	状態	4
表情	7	生活	4
ケア	6	声	4
回復	6	不安	4
見る	6	命	4
寄り添う	5	良い	4
人	5		
退院	5		
入院	5		
理解	5		
良い	5		

活〕〔大切〕が上位に抽出された。学内群では３語以上の頻出語を選出、〔患者〕〔看護〕〔安心〕〔不安〕〔寄り添う〕が上位に抽出された（表3）。

２．「忘れられない場面」の特徴（図２）

1）臨地群の場面では、７つのサブグラフが抽出された。

(1)【患者が術後の苦痛と回復に向かい努力している姿】

サブグラフ１には〔行う〕〔姿〕〔リハビリ〕〔ベッド〕〔術後〕等の語があり、〈術後リハビリを一生懸命行っている姿〉〈術後のリハビリで靴下の着脱ができるようになった姿〉〈CPM 実施時痛そうだったが頑張っている姿〉等の記述があった。サブグラフ２には〔患者〕〔術後〕〔歩行〕〔シャワー〕〔表情〕の語があり〈術後の苦しそうな表情〉〈患者は手術後痛みがあるが中歩行していた〉〈術後のシャワー浴のさっぱりした表情〉等の記述が

表３．今、私が大切にしている看護の頻出語
（臨地群６語以上・学内群は３語以上）

臨地群		学内群	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	83	患者	33
看護	61	看護	22
寄り添う	18	安心	9
考える	17	不安	7
生活	17	寄り添う	6
大切	11	考える	5
ケア	10	チーム	4
個別	10	合わせる	4
思い	10	大切	4
人	9	安全	3
安全	8	状況	3
不安	8	生活	3
退院	7	声	3
入院	7	提供	3
緩和	6		
関わり	6		
気持ち	6		
行う	6		
自分	6		
笑顔	6		
提供	6		
目	6		
理解	6		
立場	6		

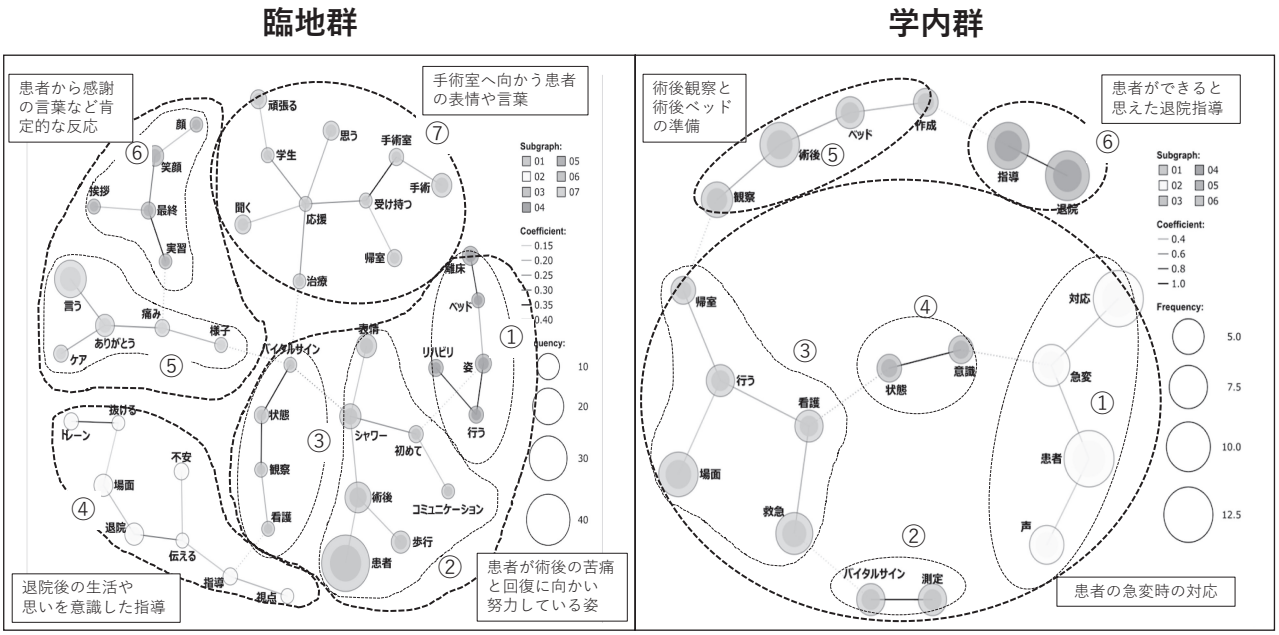

図２　「忘れられない場面」の共起ネットワーク

あった。サブグラフ３には〔バイタルサイン〕〔状態〕〔観察〕〔看護〕の語があり、〈バイタルサインを測定し状態を観察した場面〉等の記述があった。これらのことから、患者が術後の苦痛と回復に向かい努力している姿の場面とした。

(2)【退院後の生活や思いを意識した指導】

サブグラフ４には〔場面〕〔退院〕〔伝える〕〔指導〕等の語があり、〈長期的な視点を持つことを指導者から助言された場面〉や〈退院後今まで続けてきた仕事が続けられるか、不安な気持ちを伝えられた時〉等の記述があり、退院後の生活や思いを意識した場面であった。これらのことから、退院後の生活や思いを意識した指導の場面とした。

(3)【患者から感謝の言葉や肯定的な反応】

サブグラフ５には〔言う〕〔ありがとう〕〔痛み〕〔様子〕〔ケア〕等の語があり、〈術後の体交時、痛みが和らぎ楽になったと感謝の言葉を言ってもらった〉等の記述があった。サブグラフ６には〔笑顔〕〔最終〕〔挨拶〕〔実習〕〔顔〕等があり、〈あなたの笑顔が一番の治療になった。研修生のおかげで治りが早いといわれた。〉等の記述があった。この２つのサブグラフを合わせて、患者から言語や表情で肯定的な反応があった場面であった。これらのことから、患者から感謝の言葉など肯定的な反応があった場面とした。

(4)【手術室に向かう患者の表情や言葉】

サブグラフ７には〔手術〕〔聞く〕〔応援〕〔治療〕〔思う〕〔受け持つ〕等の語があり、〈手術室に向かう表情。手術室に行く前に応援してくれると聞かれた〉等の記述があった。手術室に行く患者との対応場面であった。これらのことから、手術室に向かう患者の表情や言葉とした。

2）学内群の場面では、６つのサブグラフが抽出された。

(1)【患者の急変時の対応】

サブグラフ１には〔患者〕〔急変〕〔対応〕〔声〕等の語があり、〈患者さんが急変した時の対応〉〈意識のない患者さんへの対応〉等の記述があった。サブグラフ２には、〔バイタルサイン〕〔測定〕等の語があり、〈帰室時のバイタルサインの測定時〉等の記載があった。サブグラフ３には〔場面〕〔行う〕〔看護〕〔救急〕〔帰室〕等の語があり、〈受け持ち患者の急変時の初期対応を初めて行う〉〈みんなで声をかけて患者の救急処置ができた場面〉等に記述があった。サブグラフ４には〔状態〕〔意識〕等の語があり、〈患者さんが意識のない状態〉等の記述があった。サブグラフ１、２、３、４の特

徴は患者の状態が急変した時に遭遇した場面であった。患者の急変時にうまく対応できたこと、できなかったことなど患者の生命に直結する事態に対応したこととして患者の急変時の対応の場面とした。

(2)【術後観察と術後ベッドの準備】

サブグラフ5には〔術後〕〔観察〕〔ベッド〕〔作成〕等の語があり、〈術後患者の観察がうまくできなかった〉〈術後ベッドの作成が不十分〉等の記載があった。手術後の患者の観察やベッドなどの準備場面であった。これらのことから、術後観察と術後ベッドの準備の場面とした。

(3)【患者ができると思えた退院指導】

サブグラフ6には〔退院〕〔指導〕等の語があり、〈患者にわかりやすいようパンフレットを作成して退院指導をした〉〈退院指導時、患者が「それならできそう」といった〉等の記述があった。患者の退院指導の場面であった。これらのことから、患者ができると思えた退院指導の場面とした。

3.「こだわっていること、関心を持っていること」の特徴（図3）

1) 臨地群の「こだわっていること、関心を持っていること」では、8つのサブグラフが抽出された。

(1)【患者の思い気持ちを考える】

サブグラフ1には、〔身体〕〔疾患〕〔心理〕〔思い〕〔相手〕〔自分〕等の語があり、〈身体面だけではなく心理面に配慮する〉〈個別性や疾患、術式など〉の記載があった。サブグラフ2は〔考える〕〔言葉〕等の語があり、〈患者さんが発したことばの意味を考える〉等の記述があった。サブグラフ6には〔日常〕〔生活〕等の語があり〈日常の生活の環境にできるだけ近づける〉等の記述があった。この3つのサブグラフを合わせて患者の日常の生活や治療方法等様々な思いを考えることに関心があった。これらのことから、患者の思い気持ちを考えることに関心があるとした。

(2)【苦痛や不安の緩和】

サブグラフ3には、〔不安〕〔緩和〕〔リラックス〕〔支援〕〔自立〕等の語があり、〈不安を緩和するためにはどうしたらよいか〉等の記載があった。患者の苦痛や不安の軽減することに関心であった。これらのことから、苦痛や不安の緩和に関心があるとした。

(3)【患者が退院後の生活に向けて回復していく過程】

サブグラフ4には、〔回復〕〔退院〕〔病院〕〔早い〕〔良い〕等の語があり、〈患者が自分自身で回

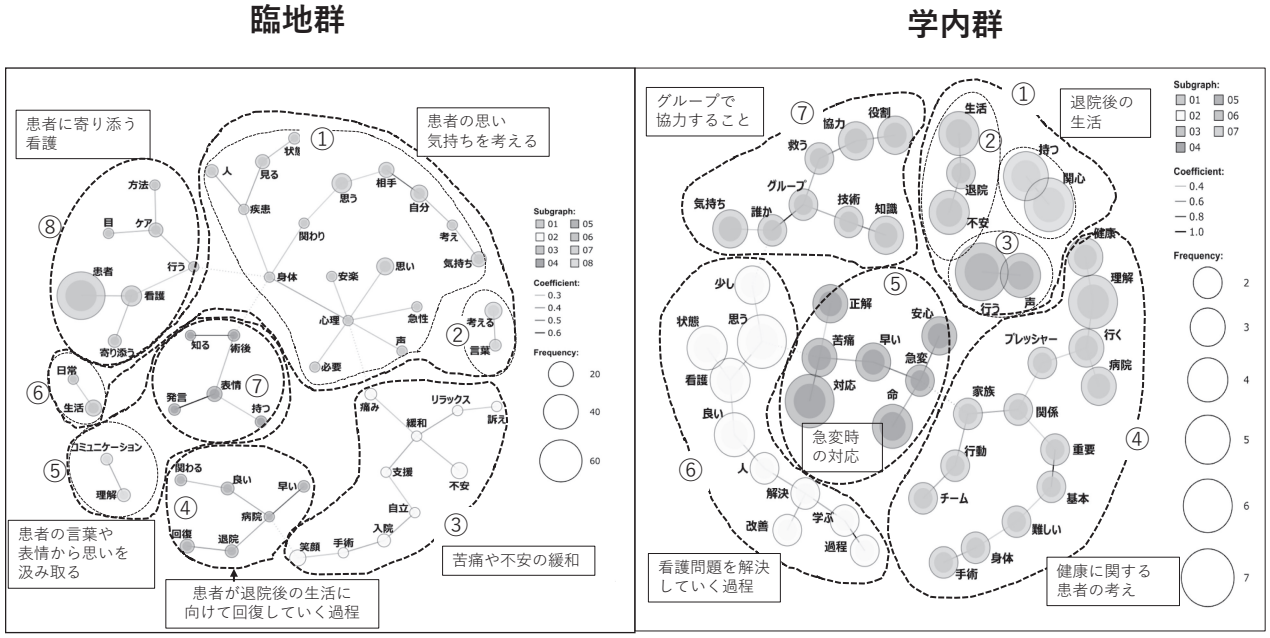

図3 「こだわっていること、関心をもっていること」共起ネットワーク

復していく力〉等の記載があった。患者が退院を意識し回復することに関心であった。患者が退院後の生活に向けて回復していく過程に関心があるとした。

(4)【患者の言葉や表情から思いを汲み取る】

サブグラフ5には、〔理解〕〔コミュニケーション〕等の語があり、〈患者とのコミュニケーションを大切にしたい〉等に記載があった。サブグラフ7には〔表情〕〔発言〕〔術後〕等の語があり〈患者の表情や思いを理解する〉と記載があった。コミュニケーションを通して、患者の発言はもちろん、その表情を汲み取り、解釈することとし、患者の言葉や表情から思いを汲み取ることに関心があるとした。

(5)【患者に寄り添う看護】

サブグラフ8には〔患者〕〔看護〕〔寄り添う〕〔ケア〕等の語があり〈患者さんの本当の気持ちを思いどれだけ近づけるか〉等の記載があった。これらのことから、患者に寄り添う看護に関心があるとした。

2）学内群の「こだわっていること、関心を持っていること」では、7つのサブグラフが抽出された。

(1)【退院後の生活】

サブグラフ1には〔持つ〕〔関心〕等の語があり、〈患者の安楽に関心があった〉等の記載があった。サブグラフ2には〔生活〕〔退院〕〔不安〕等の語があり、〈退院後の生活が前向きになるように〉等の記載があった。サブグラフ3には〔行う〕〔声〕があり、〈どのような声がけを行えば良いか〉等の記載があった。これらのことから、退院後の生活に関心があるとした。

(2)【健康に関する患者の考え】

サブグラフ4には、〔理解〕〔健康〕〔病院〕〔行く〕〔プレッシャー〕〔関係〕〔家族〕等の語があり、〈患者自身が理解し自分の知識として蓄え健康に向かう〉〈家族と患者の関係がこれまでと変わらずに〉等の記載があった。健康に関する考え方や家族との関わりであり、これらのことから健康に関する患者の考えに関心があるとした。

(3)【急変時の対応】

サブグラフ5には、〔対応〕〔苦痛〕〔正解〕〔早い〕〔命〕〔急変〕等の語があり、〈急変した時の対応〉等の記述があり、患者の状態が急変した時の対応で、患者の生命に直結する事態であり、これらのことから急変時の対応に関心があるとした。

(4)【看護問題を解決していく過程】

サブグラフ6には、〔思う〕〔看護〕〔状態〕〔良い〕〔人〕等の語があり、〈患者の状態に合わせて看護をしたい〉等の記述があり、患者の状態に合わせ改善策を考えていく過程について学ぶことであり、これらのことから看護問題を解決していく過程に関心があるとした。

(5)【グループで協力すること】

サブグラフ7には、〔気持ち〕〔確か〕〔グループ〕〔救う〕〔技術〕〔知識〕等の語があり、〈グループで協力して救う〉〈役割を理解する〉等の記述があり、グループで協力しあい、知識と技術をもつことであり、これらのことからグループで協力することに関心があるとした。

4. 今、私が大切にしている看護の特徴（図4）

1）臨地群の「今、私が大切にしている看護」では、6つのサブグラフが抽出された。

(1)【思いが表出できる関わり】

サブグラフ1には、〔思い〕〔表出〕〔関わり〕〔技術〕〔思う〕等の語があり、〈患者さんの思いが表出できる〉等の記述があった。患者との関わりの中で患者自信の内面や思いが表出できることを大切にしたいとし、これらのことから、患者の思いが表出できる関わりを大切にするとした。

(2)【患者の苦痛や不安を理解し寄り添う看護】

サブグラフ2には、〔患者〕〔看護〕〔寄り添う〕〔考える〕等の語があり、〈患者さんに寄り添った看護〉〈患者さんのために何ができるか考える〉等の記述があった。これらのことから患者の立場で考え寄り添う看護が大切であり、患者の苦痛や不安を理解し寄り添う看護を大切にするとした。

(3)【五感を使ったコミュニケーション】

サブグラフ3には、〔目〕〔向ける〕〔表情〕〔コ

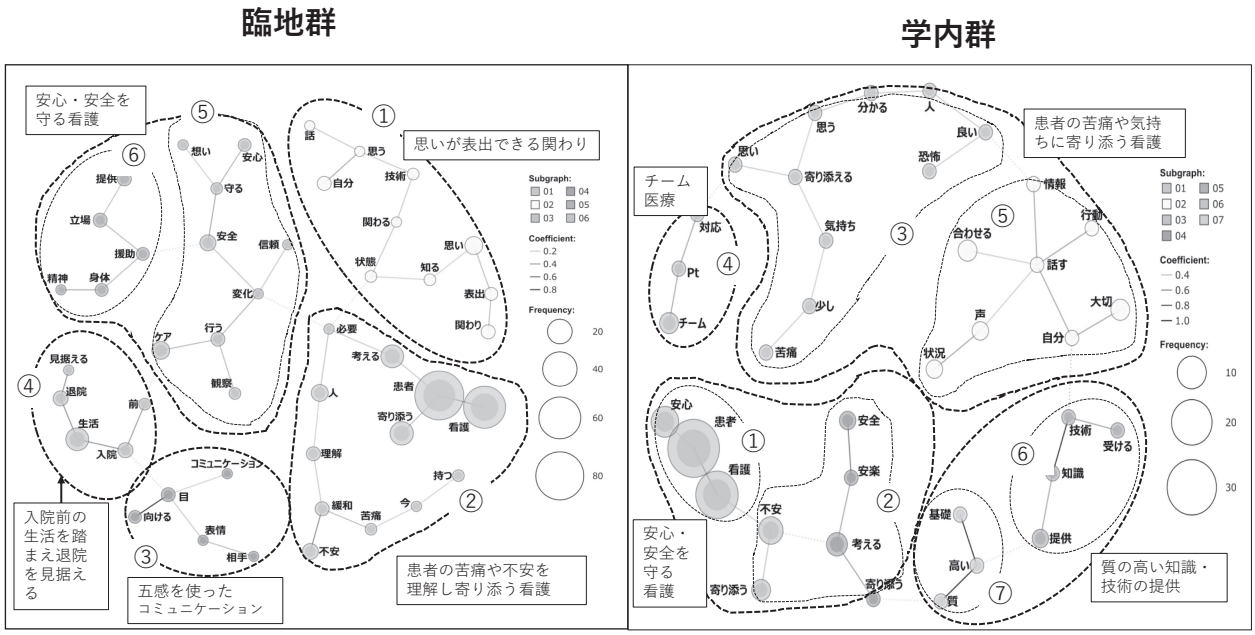

図４　「今、私が大切にしている看護」共起ネットワーク

ミュニケーション〕等の語があり、〈表情を汲み取る〉〈患者の目線に合わせコミュニケーションをとる〉等の記述があった。表情や目、その場の雰囲気も感じながらコミュニケーションをとること、五感を使ったコミュニケーションを大切にしていた。これらのことから、五感を使ったコミュニケーションを大切にするとした。

(4)【入院前の生活を踏まえ退院を見据える】

サブグラフ４には、〔生活〕〔退院〕〔入院〕〔前〕等の語があり、〈退院後の生活を考えて〉〈入院前の生活〉〈その人らしく〉等の記述があった。患者の入院前の生活をふまえ退院を見据えることが大切であり、これらのことから、入院前の生活を踏まえ退院を見据えることを大切にするとした。

(5)【安心・安全を守る看護】

サブグラフ５には、〔安全〕〔守る〕〔安心〕〔変化〕〔行う〕〔ケア〕等の語があり、〈患者にとって安全で安楽な看護〉〈患者の状態の変化を分析〉等の記述があった。サブグラフ６には、〔提供〕〔立場〕〔援助〕等の語があり、〈患者の立場になって〉〈何をしてほしいか考えてそのケアを提供〉等の記述があった。変化に応じ、患者の安全を守りながら心身の援助を提供し患者が安心することを大切にしていた。これらのことから、安心・安全を守る援助を大切にするとした。

2) 学内群の「今、私が大切にしている看護」では、７つのサブグラフが抽出された。

(1)【安心・安全を守る看護】

サブグラフ１には、〔患者〕〔看護〕〔安心〕の語があり、〈患者の状態に合わせた看護〉〈患者が安心して治療を受けられる〉等の記述があった。サブグラフ２には、〔不安〕〔寄り添う〕〔考える〕〔安楽〕等の語があり、〈不安を受け止める〉〈患者に寄り添う〉〈安全・安楽を考える〉等の記述があり、これらのことから、患者の安心・安全を守る看護を大切にするとした。

(2)【患者の苦痛や気持ちに寄り添う看護】

サブグラフ３には、〔苦痛〕〔少し〕〔気持ち〕〔寄り添う〕〔思い〕等の語があり、〈苦痛を和らげたい〉〈患者の思いや苦しみを分かる〉等の記述があった。サブグラフ５は〔話す〕〔合わせる〕〔行動〕等の語があり、〈患者がどのような状況なのか〉〈患者の状態に合わせる〉等の記述があった。患者の状態を把握し、苦痛の軽減し状況や思い気持ちに寄り添うことを大切にするとし、これらのことから患者の苦痛や気持ちに寄り添う看護を大切にするとした。

(3)【チーム医療】

サブグラフ４には、〔チーム〕〔Pt〕〔対応〕の語があり、チームで患者に対応することを大切にすることから、チーム医療を大切にするとした。

(4)【質の高い知識・技術の提供】

サブグラフ６は〔技術〕〔受ける〕〔知識〕〔提供〕等の語があった。〈知識・技術に自信を持ち〉〈質の高い看護の提供〉等の記載があった。サブグラフ７は〔質〕〔高い〕〔基礎〕であり、〈質の高い看護〉等の記述があった。患者に質の高い知識と技術を提供することが大切であるとし、これらのことから、質の高い知識・技術を患者に提供することを大切にするとした。

Ⅵ．考察

学生が経験を振り返り、「大切にしている看護」へと学びを深めていくプロセスと看護リフレクションシートを用いた振り返りの意義について考察する。

１．忘れられない場面

実習形態に関わらず臨地群、学内群ともに「患者の周術期の場面」が想起の中心であり、急性期看護の対象と一致していた。臨地群は、【手術室に向かう患者の表情や言葉】や【患者から感謝の言葉や肯定的な反応】が特徴であった。手術室という特殊な環境と環境に付随した患者の反応が記憶に残った、患者と良い関係を築けたという自信につながり、記憶に残ったと考えられる。学内群では【患者の急変時の対応】が特徴であった。代替実習３週目事例の不整脈患者の急変時にうまく対応できたことやできなかったことなど患者の生命に直結する事態に対応したため、この場面の印象が強く残ったと推察する。

２．こだわっていること、関心を持っていること

受け持ち患者を中心とした看護学実習であり、関心ごとは、患者の看護が中心であった。忘れられない場面で想起した対象や場面に関する看護にこだわりや関心を示していた。急性期看護の重要な視点は、生命の維持、苦痛の緩和、情緒的安寧と精神機能の回復、意思決定支援、症状の悪化および合併症の予防、機能障害の改善、家族医療者間の調整である。また、急性状態では、適切な治療や看護により生命の危機を回避すること、苦痛の緩和が不可欠である［13］。本研究で抽出された関心を持っていることも同様な傾向がみられ、生命の危機を回避すること、苦痛の緩和、回復へ援助が中心となっていた。臨地群では、患者とのコミュニケーションや患者の思いへの関心に特徴がみられた。これは、臨地実習において、患者と直接関わる体験からから、思いを汲み取ることやコミュニケーションの難しさと大切さの学びを得たと考える。学内群の【グループで協力すること】は、患者が急変した場面での協力体制や同じ事例を受け持ったことより、知識･技術を高めること、学生間の協力の必要性を体験したことが関係していると考える。

３．今、私が大切にしている看護

「今、私が大切にしている看護」では、【安心、安全を守る看護】と【患者の苦痛や不安に寄り添う看護】が臨地群、学内群の共通カテゴリーとして明らかになった。患者の気持ちや思いに寄り添うという漠然とした記載内容ではあるが､臨地群、学内群それぞれの体験から経験に学び得た語であると考える。青木ら［14］は、先行研究において看護学生の看護観は、1，2学年次の学生を対象にしたものは、「患者の安全を守る」「患者・家族を中心にその立場に立つ」「信頼関係を築く」、3，4年次の学生を対象にしたものは、1，2年次で形成された看護観と同じ内容とともに、個人の尊重やチーム医療の一員としての看護師の役割にまで視野が広がっていたと、述べている。また、石渡ら［15］は、ICU・HCUの実習後の学びの分析から、「患者の声に耳を傾け、心に寄り添う看護の大切さ」「患者の不安定な状態にいち早く気づける観察眼か持てる看護師」「チームで協力」などの学生の看護観を報告している。本研究も同じ傾向がみられた。手術という急性期の場面においての体験を印象深く記憶しているが、その場面をあらためてリフレクションすることで、自分が得ている知識やスキル、考え方を整理し意味づけられたことで、着目すべき重要な視点に加え、新た

な視点も加わり、知の広がりと深まりができたのではないかと推察できた。

本来、臨地実習場面で経験する【チーム医療】の視点が、臨地群には見られなかった。コロナ禍の実習であり、カンファレンスや栄養サポートチーム（NST）、感染制御チーム（ICT）などの活動に人数制限があり、学生が参加する機会が制限さていたこと、実習施設の条件により、チーム医療に関するカンファレンスが開催される時間に実習が設定できなかったことも影響していると考える。実施される実習形態で実習目標が達成できない場合、学内で補完することも必要である。

また、A短期大学3年次の領域実習は、実習グループごとに実習時期が異なる。成人看護学実習（急性期）も、3年次5月の領域実習開始時から各看護学領域の実習が終了する11月に実習を行った学生もおり、学習進度や他領域の実習経験の違いも「今、大切にしている看護」に影響を与えた可能性がある。

4．看護リフレクションシートを用いた振り返りの意義

1）振り返りの第1段階（個人の記述）

「忘れられない場面」は、経験の中で個人の中にある認知の仕方（枠組み・価値観）で取捨選択され、既存の知識に関連図けられながら情報が記憶として残っていく［16］。学生の忘れられない場面も関心があることに対する記憶であり「現象の想起」にあたる。「なぜ忘れなかったのか」と、自問自答する「内省」にあたる。自問自答する中で、「こだわっていること、関心を持っていることとして、看護に対する関心の焦点化がされる「構造」にあたる。振り返りの中で浮かんだこと、見えてきたことを書き、看護の知の広がり・深まりを追記して、「今、私が大切にしている看護」として未来に向かってのこだわり「本質」、現時点の学生の看護観を表現している。個人での記述の段階で、看護リフレクションシートの枠組みを用いて記憶を呼び起こし、無意識に考えていた看護を意識化することにつながっていると考える。

2）第2段階（仲間との語り合い）

振り返りの第1段階で記述した「看護リフレクションシート」をもとに、順番にグループ内の学生や教員と語る。仲間との語りは、ナラティブといわれる。ナラティブは、対話という形式の中で，語り手が聴き手に自己の体験を語り，聴き手は語られるという共同作用を通して，語られた体験が語り手にとってどのような意味があるのかを認識し，語り手が過去の生活体験の中から自身の潜在能力をみつけ，新しい自己を再び見出して今後の原動力を引き出すことを可能にする方法である［17］。陣田［18］は、仲間との語り（ナラティブ）を知の相互作用であり、知の広がりと深まりと、述べている。「看護リフレクションシート」の記述内容を語ることで、語り手の学生は、記述以上の語りとなり、言語化することで語り手の学びも深まる。聞き手は他者の経験や看護への関心、看護観を聴くことにより、他者の経験から学ぶこともできると考える。

コロナ禍の臨地実習において、「経験からの学び」の機会を確保することは重要である。P.ベナー［19］は、学生が自己の臨床経験を振り返る機会を持つことができれば、経験的学修の効果は高まる。実習後のカンファレンスはその振り返り（リフレクション）の理想的な時間である、と述べている。成人看護学実習（急性期）において、臨地群、学内群ともに、患者との関わり、ケアを振り返る時間を実習最終カンファレンスの時期に設定したことは効果的であったと考える。臨地群では患者との関わり、指導者や多職種とのさまざまな経験ができ多様な学びが期待できる。学内群においても、代替実習として実習目標に沿った、臨床をイメージできる事例設定と実習方法を選択することで、学生は臨地実習に近い経験をしていた。臨地実習、代替実習としての学内実習においても学生は、経験した場面から学生の思いや気づき、看護への関心が導き出されていた。臨地実習、学内実習の経験をそのままにせず、意図的な振り返り（リフレクション）や仲間との語り（ナラティブ）を通して、他者の経験からも学んでいく必要性があると考える。今後、仲間との語り（ナラティ

ブ）の効果についても評価していく必要がある。

Ⅶ. 結論

1. 臨地実習を経験した学生は、「忘れられない場面」として【患者が術後の苦痛と回復に向かい努力している姿】【退院後の生活や思いを意識した指導】【患者から感謝の言葉や肯定的な反応】【手術室に向かう患者の表情や言葉】を挙げており、【患者の思い気持ちを考える】【苦痛や不安の緩和】【患者が退院後の生活に向けて回復していく過程】【患者の言葉や表情から思いを汲み取る】【患者に寄り添う看護】に関心を持っていた。

2. 代替実習として学内実習を経験した学生は、「忘れられない場面」として【患者の急変時の対応】【術後観察と術後ベッドの準備】【患者ができると思えた退院指導】を挙げており、【退院後の生活】【健康に関する患者の考え】【急変時の対応】【看護問題を解決していく過程】【グループで協力すること】に関心を持っていた。

3. 学生が「大切にしている看護」は、実習形態にかかわらず、【患者の苦痛や不安を理解し寄り添う看護】【安心・安全を守る看護】であった。臨地実習を経験した学生は、患者と直接関わる経験から、思いを汲み取ることやコミュニケーションの難しさと大切さを捉えていた。代替実習では、患者が急変した事例設定から質の高い知識・技術やチームで協力することを大切にしたいと捉えており、実習形態による学びの違いが明らかになった。

4. コロナ禍の成人看護学実習（急性期）において、学生は実習形態にかかわらず、経験を意図的に振り返り、言語化し、仲間との語り合いをすることで、成人看護学実習（急性期）の経験から「大切にしている看護」へと学びを深めており、看護学実習にリフレクションを活用する意義が示唆された。

Ⅷ. 本研究の限界と今後の課題

本研究はＡ短期大学の学生が対象であり、結果の一般化には限界がある。本研究で調査した内容は、看護リフレクションシートを使用して表現されたものであり、対象となった学生の「大切にしている看護」のすべてが表出されているわけではない。また、表現力が乏しく、言語化が苦手な学生は経験の明確化が困難なことが予測される。今後は対象者への半構造的な面接技法も取り入れ、大切にしたい看護、すなわち、看護観および看護観の形成に影響する要因、仲間との語り（ナラティブ）の効果について明らかにすることが課題である。

Ⅸ. 謝辞

本研究への調査参加を快諾してくださった学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

[1] 二十軒温美：看護学先行研究からみた臨地実習指導者の現状と課題．園田学園女子大学論文集，2017；51：53-60.

[2] 文部科学省ホームページ　新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書　看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（2022 年 5 月 17 日引用）

[3] 文部科学省ホームページ　大学における看護実践能力の育成に向けて　看護学教育の在り方に関する検討会報告 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm（平成 4 年 5 月 1 日引用）

[4] 佐藤みつ子，宇佐美千恵子，青木康子：看護教育における授業設計．医学書院、東京，2008，pp96.

[5] 田村由美：看護基礎教育におけるリフレクションの実践．看護研究，2008；41：197-207.

[6] 陣田泰子：陣田塾　看護の“知の見える化”

で現場が変わる！ Nursig BUSINESS 2015 夏季増刊，メディカ出版，東京，2015, pp.38-42.

[7] 中村朋子，天本都，小島光華，他：コロナ禍における母性看護学の地域母子支援施設とシミュレーション実習の効果と課題　テキストマイニングを用いた実習のまとめの内容分析から．兵庫大学論集．2022；27-28：127-135.

[8] 嶋津佑亮，船場清三，小原理恵子，他：【COVID-19と教育の新たな試み】COVID-19禍における成人看護学実習Ⅱの報告　学内・オンライン実習から考える今後の実習の在り方．東都大学紀要．2021；11（1）：103-108.

[9] 日本看護管理学会　看護管理用語集（第3版）．日本看護協会出版会，東京，2021, pp.250-251.

[10] 阿部幸恵：1年で育つ！新人＆先輩ナースのためのシミュレーション・シナリオ集秋編（第1版）．日本看護協会出版会，東京，2014, pp.28-33, 47-50, 141-163.

[11] 陣田泰子：看護現場学への招待－エキスパートは現場で育つ（第2版）．医学書院，東京，2019, pp.150-160.

[12] 末永美喜：テキストマイニング入門：Excel と KH Coder でわかるデータ分析（第1版）．オーム社，2019

[13] 佐藤正美：急性の状態に患者と家族に対する看護．看護学テキスト NICE 成人看護学急性期Ⅰ－概論・周手術期看護（改訂第2版），林直子，佐藤まゆみ、南江堂，東京，2015，31-33.

[14] 青木亜砂子，佐々木律子：看護学生の看護観の形成に関する文献検討．北海道文教大学研究紀要．2019；43. 107-115.

[15] 石渡智恵美，菱刈美和子：周手術期実習における ICU・HCU 看護実習を体験した看護学生の学びと看護観に関する研究．帝京科学大学紀要．2018；14：111-116.

[16] 陣田泰子：前掲注［6］，pp142.

[17] 東 サトエ，柳川 育美，白石 裕子他：看護教育へのナラティヴ看護実践モデルの導入に関する研究（1）－ ナラティヴ看護］実践モデルの構築．南九州看護研究誌．2017；15：21-29.

[18] 陣田泰子：前掲注［6］，pp153.

[19] パトリシアベナー，モリーサットフェン，ビクトリアレオナード，他（2011）/早野 ZITO 真佐子訳（2013）：ベナー ナースを育てる（第1版），医学書院，東京．